今様揃

へ 13
2922
3上

へ13
2922
3
主
六十四号
昭和九年七月六日
購求

競艷當世樺三編自序

先年おもひ合てやうの物編を作りもの〳〵。文永堂主人の懇請に偶中。蓋傳奇の島嶼。諸人の礫。連年草稿の二篇目。全く評判よろしゝ也。喜ばしゝ。はづかしゝ。過ぎたる。この〳〵ところも掃測〳〵。酒も過ぎたるあり

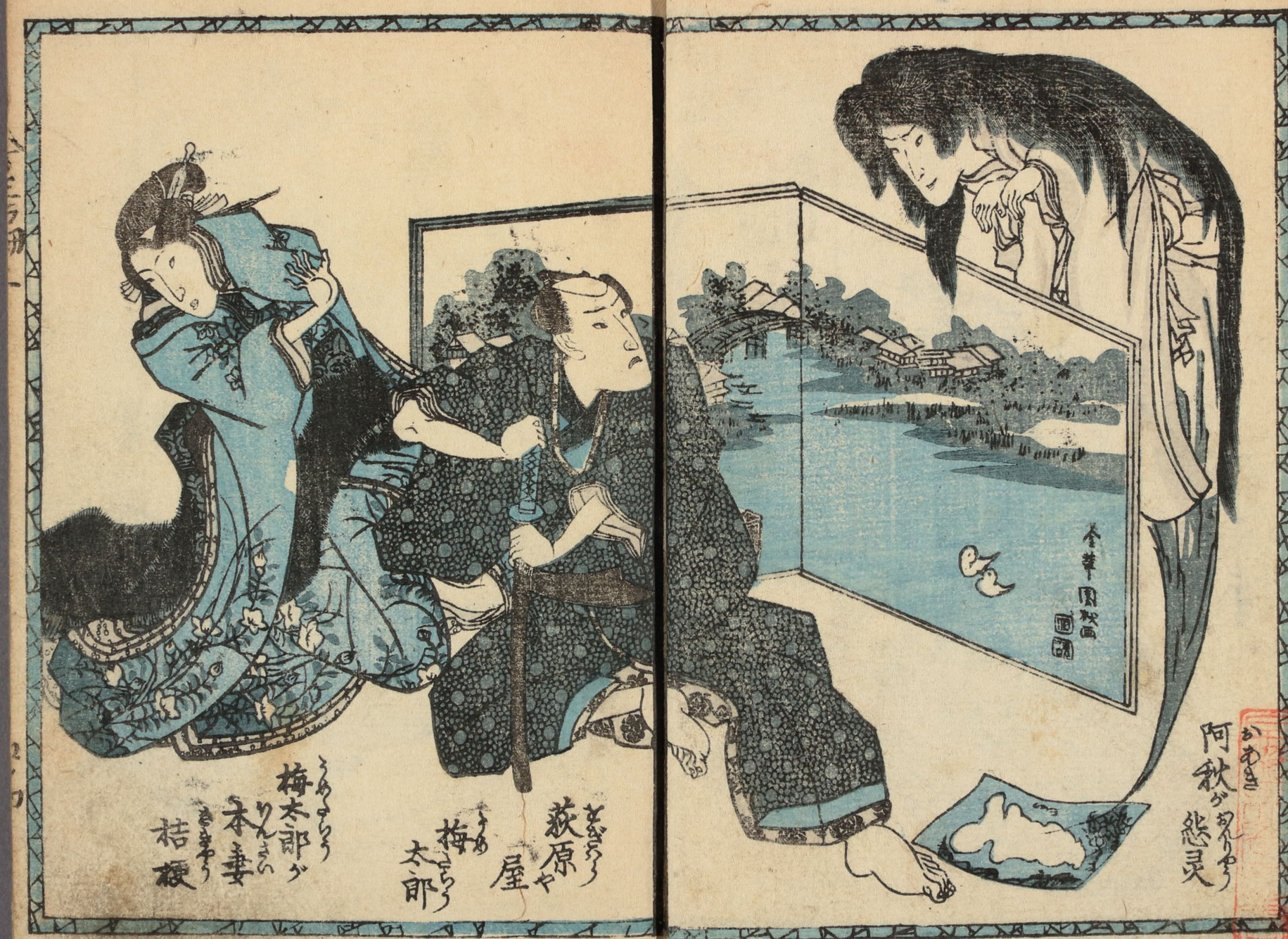
升飲て酔ぎて歌を作りもしぬべし。過
てるを為なるは及ぶべからざるなり。あるほどたるは
勝れり。素より如。素性なごの、つゆ(三編)で。
三冊づゝ。婚姻の規式ものゝ。
も三編づゝ如。約束の筆ぢあり。
長い論問答の趣交り。百萬年の法
寿命。巳の亟まの寿命百年もあるる。

月と端折て試毫ふもの

二代目ち

十返舎一九

悪漢
嘉十兵衛
漁師
網八
後に
小夜戸
孫之進と改む
唄鼓
糸吉
後に
梅太郎が
妾となる


梅太郎が
本妻
桔梗
萩原屋
梅太郎
阿秋が怨霊

古今集　きちかう物の名

友則

秋ちかう野と大和なりける露をば
たまにぬけるしらたまかとぞみる

作者自画

仇競今様櫛三編上之巻

江戸　十返舎一九著

第十四回　花むしろ

東風吹バ匂ひをこせよ梅の花主なしとして春な忘そ。

と菅家筑紫に坐して詠じ給ひし歌より花梅と
いふ故事出来。思ひ合る拉春が再會その身ハ不測ホ生
存命。ゝ　ゝ　ゝ　

呼まて八。引ゝ鶯の名高きも。原来美麗き生得ゝ殊更雲ゝ遠き籠り。恰悄ゝ性ゝ川寄者ゝ
嗅ゝ。自ゝ作り出しゝ節附し。嗅ひそめし世ゝ伝へて藤右節といふ。今島八都方の大
賈客摂津国屋嘉兵衛ゝ誘引ゝ。花見ゝ出
ゝ。梅丘山八引連ゝ業平周ひん湯ゝ得んと
若鶯ゝ茅屋ゝ見つけ。百鶯亭ゝ額ゝ目当ゝ何ゝ
く立八ゝ。豈図らんや日来より。嘉ひ慕ひる梅右衛門

此知ゝ隠ゝ。俗住居柴の戸ざしの閑居の身春知顔ゝ
金長鳥の筧の水の氷解ゝ。苔ゝ外ゝ紡ゝ人ゝ山風
のゝ吹ゝ遠山ゝ出ゝ一個の僕ゝ。ゝ傷ゝ。ゝ梅花教授ゝ
庭ゝ移ゝ。ゝ是ゝ。ゝ嘉経八楽ゝ周ゝ。ゝ清樹ゝ
閑ゝ。阿迦級ゝ。ゝ掌ゝ。ゝ名ゝ春頓生苔ゝ。ゝ与
楽南充備ゝ。ゝ急ゝ。ゝ八柴ゝ。ゝ。桑門ゝ境界ゝ行ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。二編ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
も。ヤアゝ春ゝ。ゝ。ゝ。

うつくしあるうのるに上そぶもいでゞ。其後樣よとり
うまつ〜縁ぞ先ごろね梅を卿八こゞまりる。春が鶯の
元のきうでゞ。梅へ。ぞうの訳ぐ今まつぐも
あぐくくトいあぐくもりやまきゆうまいでゞあるまいうと。見上見おろし
うろうくまぶ「サア」それまハぶんく仕掛のある事。
あるこゝまきどうくく家こ入「さまぶ」此知ゝ世話のぐる
郷故をゝあゝゆ忘話を川ぞや混混小路へ義知ゝ迫
つく聲〳〵。やうく一ふぶ八幡へ日参のる祝ゝ立よ

そゝゝゝゝ逢ゝゝゝゝゝのるゝの後ゝゝ門へも出さま
ぞうゝゝく〜と因人の獄屋ゝ居る山地〜ゝ宝飛ぶ鳥狀
ゝゝゝんで見をゝゝゝゝのうちゝ澤川へ女の八水とゝゝゝぐ
章にかう根絶ゝく〜ゝゝゝぶ柳の枝ゝ掛くある護
ゝ慶の書付ゝ建久二年の正月の誕生幼名ゝ川ゝ
名をゝゝゝゝゝとゝるゝ〜ゝゝゝゝの經おそろしい人の目門と
ゝの曇び出尾池小路へゆくゝゝ。ゝゝゝゝ生ゝゝゝゝ川の
ゝ屋ゝゝゝ。ゝに〜ゝ守紙ゝゝゝゝゝゝゝゝ

直さ甚如よう彩をかくし。跡ふくまする家語こそ方
のかゝ不野してゝどうも秋と源ひとげこまうもとうう公に
そまれ縁組も義理ある親の親後世ものく一具八年八
しまいどもも藏の契うゝ結ばび。名のく傷まの作こい
中のどうぞも秋ふ相手をはうさ主府のはかね紅極を其
まく人ね譲ようとかのふまうせねも秋が浦切とても品八
切るやううりまバ身投のさうぎの時の作ふ身とのゞまく
紅色と作りふ。名ふ所縁ある梅丘山美江菴と結びる縁

どバ長き来ままぐくと。アレヨやあゞとく位牌を思ゞう重
事の看経斎ものく向。初を墓の彩着く世と拾こうる
優婆塞行こくく重き身とらこれうら。おもひもようぬ
今鳥の遠藤　そこゝ八中もくゞんぐの濁うねお寿の
やどいぐ御禮八きうさまこもそ宝ものく遺書ばヨくふぎ
さりまくくこらう。あの通りのむの世門ものさまうこ義江ぎん
のうるこのあ八ものせもあくまあ四ものくさと。同よ重ゞ
縛のこゞまう。滑川八八ふ八ふ八揚らま

萬葉集
梅丘山人
梅丘郭公
再会生

夫抱き養生大留村の細八とて深い人の妻。
助けて天公よりぐ捨て浮世よりあらべ出ずしろかう
ぞうとうちふと高天嶺四郎兵衛又四郎その人
の母人の貧困貧苦の中の苦行いやの浮世を捨て
命の親の恩ある人ようさの病しの折もあらべ
おのうち。図に乗て知らしたその人八ようの実の伯母
ひのもかくはぞんじの。比企ガ谷の母の為。実の嫁の
幸ようと孫市さるぞ孫人。その後八どうの捨るやう。

ようりぐ自のと毎日毎歩。苦つけく苦しい門ごその人に不
測ふも。元ひらまとも足せ。その後言る大病の人
天武八備おく。貧しの世帯
の細燈り不図おすい出ぐ川寿へ歌妓のようあ
と賣その金ぐ業武ようの人。僥倖と幸獲ようべ嬢
ようまし。惜ようれ命をうぐ人の妻ようと
いやの孫しい勤の対ぐ。伯母を救ひる。一旦恩ある主
人ふ仇ぐ報ようまし。伯母ようも後夫の細八どの母。

これと思ひ込みて。今日まで人ごくしの。川端の糸吉と。人不呼見〜歌数と 橋へさそふ糸吉と名の高い藝者

やがて其方であるぞ。行ひ澄ます弾宮の男子目の毒

なる婦人とは。誓ひ深く四遍へ妻ちゃで。とのつこゆ名代者

決めども。見ずに。苦労を永くさせる。邪く

対の罪作り。実に天縁の縁〜とは。殺小禽ごとつこと

形〜と神の結び〜二人が中。切れ不測の身のうえで

こざんとトこうさのる。思ひきり走る箱屋〜の八六が

八べさうく天まごく。やうとんど事が出来ぬ。糸屋

るとは。合ふ合ふく。親方の大祝儀。どこうとおもひく

一度んこざねこサアく早くト素足をうり。この人を

あてでしへ。イヤあるこざでしのこの義抱きまでご何

ざつこうく。地ひつく。岳こまる。知にあくぶモシ旦那様

せ〜。かうつこ見けざイヤ。ようアレあの通りさ岩人をあの

通り。一言も出ねさ。ア小。いやのうこうるく。ゑんごも

金ごけがあく。ふーきごく。とひく居ト。このちー

人声遠く近く聞えまして梅吉戸をひきあけ窓より
覗く外面へ大勢来りて高千三郎を縄をかけ
表へ出ると同類がわらうわらふ隠さずとねたせ
親方の金五百両と為替の形の三百両まで金ようばうひ
切るまいものと思ひ彼面へ方へ大ていとぶやもうらの
サア同類をわらせ〳〵。こりゃ〳〵親方さんよ。渡さるゝ
此方ホンモノ絵ばかる今迄者〳〵同類ぢやわるの六人の者
〳〵遠く〳〵逃げうせ〳〵イヤあらや義者どもぢや。掛り

金ものこらずぢやとくまんざうあの金紙渡んぐそも
明軍の好者ちや。此方分くてでんせ〳〵好者も
ある物へアレわたの家へ逃んぐもうとおのまろ同友
ちやあろ。あのとろもひとりの小僧ひく縁ちく形。
発髪小僧の義兵衛の形変だややぶ。世話
しのんで金の形を。極下同当日詮議せいと親方
の命ぢや。多紙で先へしのんでこ四のみのあるのぢや
多いやぶ。早へ逃さぬ押へよと

どのとわの家の。主人が金を亡くしたるね。誰ぞせいと
びそまつ〳〵ぞふ弘高さまを箱根の八ぢぞう〳〵
戰栗徳兵衛ワットさけびく飛出し。一貝さんを迎て彩
梅を助る。糸吉のお春とどふかこの迷人のつ紙ぞくま。
萩原屋へ大神白多。緯わるまてくさ〳〵と。南人さ
やき等〳〵め裏口より洞つひ南を當ふ乃もるき山
より山成自ととりく弘多くのぞ一そぢの細逢と得
しり〳〵ぞ。家とひろくさどるわどふ。怪〳〵き邊部の茅屋ふ

一番を呼〳〵。甚知らく山路の案内紙〳〵ぞ。聖貝八やうくま。
東海道の住選へ出ぞり川さきあんど一ひろくと縁のあひるげも。
加ひとろ〳〵のんざ〳〵のどぞねく人ふ法ぞきくぞう〳〵押〳〵の
計のさきさ。法りぐ〳〵どうかうぐひのひぞりもつるのさ〳〵と
知く。ちゝぞるるの割を坂トそのあるゝ伊勢参りの乃着
大勢。掘ひの葉〳〵春も青ぞるの江戸着「コウおそ川さき
青張八。鄭唄ちくちやつひけ極。ヒヘシく〳〵ぞつ〳〵よ〳〵
ゆ〳〵い梅の花枝ぞ人よる物〳〵まく「コウあのハろ

アさきこの節ごのおいしいのハ幸兵衛まぐひるーハ芝ごこぐひごうん
でも流行唄うーまさこお祖師さまぐうぜとうーアんかわいこ
その川さきこ者ごの作者のかの糸ぎこ直傳ご「うんな
金さんあの糸ぎ色ぶ逆さこのふるまごの「さまうサ金粉
お伊勢まうハ附こうでのあの糸ぎ六日ぶん深こ川端
ぶんど者ごを買うことおりつこのご大てんらぐひご「おりこかるて男
ぎこひごうんどこの評判ぐも。色男ごあ門こ命をー
アごこうう「あこうまぐさ男ぎこひあんどこ風国ハあこぐ意ー

男こひ梅の花枝ぐ人こうまこてうんぐと行こ當り
のありこうお文句を作り出ちをこ見ちこ。大ありさ。こき茶
その幸兵衛屋惜の花うかぐひまぐう「近こうあこく辣強あこ
ま出まこうッ。新ごエへこく。雑こある湯をとこッ「雑も出人
ハあのこ寒ぐくみでも飲ち。ヨヤく白い鶏ご茶ぐ「寒ハ
生まこ義ここの形ごよ「意ー屋ー屋ーの梅の花枝ぐ人ふまを
らまこく。どこうあ屋さ活こうこ人の旗あこあるのも活屋。
トテチンテン。つこぐどこうあのひまの。ひごこも義ここー

あく。別まの御の御ものや。チテツトンチリチく「ヤンヤアリ」。
ちゃうど糸吉の作ばどわ川く仇りんくどの「コウ」そんか
ゆんどうか節より見がく〳〵もつぶやちゆりの音りを着ゆ
わまてり「こまさそんか紋付かたり唄八巴見ど。踊よ
「昨年わりのうりど。イヤ唄こいやか地歌か節も踊りる
めどの。こちやまでのどんやさんどの。ちよいとおどの。いや
どうも甚ぞーの子。まざとうーとのく兎を取わりど。そまうら
見てくわの川きゆんどどの。このどろ故人ふ門と書住ど

作の玉川ふ〜ぐぶどうもうとうかのものさ。兎の「うと
ふまま兎のどうう。ちんでもゆでも川きゆんどのるさわ
まの義きまの節ふわるのとく達ゆと今の一れがりてそうど
「まとと〜一中ぐるの「大わりさ。二中ぐのいわる。ちんと
わの糸吉とこのくのうくく〜い上よ古今比類の白い髪
の親玉ざわの色男ハりんふ冥加玉袖みるゆど。ちう〜人今
〜このくまとと花横いのちうう兎。立「ちやうう猫いの国
山奥新兎切ゆりり形〜さ。わまと濃ど猫ハ国ぐるゆぶ。

ゆゑ家者八生く持るゝ事とてのむやりゞト
さすゝ　ゆゝ梅吉東八次郎ゝ。あと人と
見と思ひ　ゆゝ。　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ
ぜゝ。折ゝ先の戻中姫よ「ハイ」と二挺ゆゝ
ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　

さる獣人食ふ事きく。相續をしてうりけるが。是もまぐれ。家吉の流りと。別るるとて。多くの金付くる事一方ならざるの恨ありぬそ。

通客の主人なるが。純文を綱八に遣はしあと。そのうへ身を付くる家財諸品異。とぐく送りつるしけるが。人ふうとじけうきゆうぐうまつく。是より両個を大角村なる綱八が亦の食客となり。二十日程送りしが落るもわるがるが。相うるとして村猫を如よ。小細なる所なるのわる銭借く。多路の指南や讀書などを善に教ふを業ひとし。養ハ琴三味線の指南をふ。遍のを供滴ぶごとく。進ふあ山まりく何ひとつ不自由なく。綱八が養しまぐく多ひとく。家よ一年たりを送りけり

第十五回　夢路の花

大畠村小程ちくき。八本原とふ処小山渕託之進とふ浪士あり。原を千葉家小仕へく。詩文の道を給ひけるが。仔細ありて退耀し。剣術の指南しく。鞍の門人あり。けるが家之富くくけり。その娘よ接捷とく天

性質の小町といふとも及びがたき。稀なる美色備はり。
今茲十七の花の新鄙ぶりは都にも。又あるまじき辯判
の。めざましくよろづ物も書も西もよく習ひうめあげるが。かる田
舎ものとは。師もうく。可惜藝をよく仕込ませ。両親幸
いとおもふ。おりひ屋けるゞ去年よりお春が聲吉所成始められ
入門とふ入あるゝど。習ひ〳〵藝の優劣〳〵何ごとも
覚えさせる。原来器用ありければ教るわざはよく深くら
ず。やがて相愛の屋敷方へ公さまと。両親よりの

屋うけり。然るに桔梗を。いかなる。梅吉郎の来和こと。
情深くやさしくく。却〳〵の在五中将。光源氏も。彼とは
おのゝ男風俗。恋こがれも。惚るる者の。思新のこと紅
色〳〵。たゞうさのこと。弥増川。お春それとなくそれば。
かりそうに。おのふく。牧さこと。親〳〵訓睦こと。
一番の怪譚説あり。有一夜の事あり〳〵が桔梗が夢よ
うにくしき娘の。十七八と見えるが。いとく煩しき辯こと。
うち芸所ついくも程の。長き髪の毛ふり乱〳〵と

しく、イイこゝ。やゞく結婚さいひらるゝ。そも〻嘉き操余
る。萩原氏村次とこのゝく嬢子あきと呼るゝあるが。
あゝ、拙者所刀祢子意こゞ是。うづ〻八〻ゝ。その時ふ祢ト
ひとりいの伝ふ彩ゞ。ゝが縁あり〻ゝ彩八吐ひ支婦と入りけるゞ。彼
人八ふ喜どゝ。ゝ涙さ中ゝ〻ゝ〻ゝ〻

此一言を聞むなりといふうち向ふ火の車。あるさの牛頭
馬頭名のくと。獄羅の鼓呵責の杖鳥八後の風と磨ぎ
猛火四方に散乱しく。獄卒ひく笞ばを声をそわらるしや
絶ぐ哭や如の涙き羅刹を。如の様に責ふとも
一念山〻しく。嘯苦しや姫やと。叫ぶ声さへ未枯く。
猛風颯と地〻しく来り。利〻川鬼の呵責よ。紅ひよ
ハまぶ打ちる鼓の音のどろ〻く。さもすさまじ火の雨
小雨雲ひ〻がり引き〻。髪の毛よりくしにそまで。あら焦
ぐやと叫ぶと見え〻。鉄くろく撃き責ぶ物を
おそふきなのとく。責り涙の人と実さふし。立上まぶ見て
如何よと押へとる人を。投ふし実轉ぶし。嬢姫の
念力怒ろしく。力量利き指嗤の女の一心彩ふ業を
も撃もうり乳し。外面へ出走さりね。

仇競今様獅三編上之巻終

仇競今様櫛三編中之巻

江戸　十返舎一九著

第十六回　嵐の花

梅太郎そこ〻に跡指南ふ。我尽しく深切ふ教へ。お春を琴三弦の稽古ふ。念をいれて教ゆるゆゑふ。門人ハ日ふ増し。月ふ添て。今ハ殿にてりしぶ。普請も廣くし庭も奇麗につゝり。梅樹數株を移し植え。桜嬢のうえふ。枝折戸の門あり。百鶯亭の額を掛たり。朝ハ未明より入

来る事。門を開くと、「ごめんなさいませ。
そのお年ののごとく〳〵。ごく大やうく。門を通りくゝる
ありません。「ヲヽよい事味しく。そのかわり晩に目を書
るとお居組りくゝよく。「うそをかうか。おまでである
まい〳〵。「お稽古やきのこまんをおくさん紙を縫く
おまつり。「りんかさ門をりまする。さ晩に目と道
〳〵上まし。「そまおんぐも見ぐらまると組むぐく
ぐりあるくゝよ。「あのお弾初の咲の豚やか時さ

居組むるの紙。「よくゝうございましよ。おんとぞもあり
〳〵。この間多くも。「どうぞ今朝をお遅い稽。「ハイ
ゆ稽ぐんよう。あのり。お師匠さん。おつうさんぐる。さまを
あのり縁くゝの姉さんうのひまゝ。おぐさ
ふあげまして。「そまをぐう。さゝう姉さんは留
山さるへ。お勤めるまさしまのござ組。「イヽエそまをお飛さん
ちの姉さんごよ。ちの組さんはぐ。げちゝ。さる「ゝ
梶乗さるへ。りんかおつうさんのゆ年公事うと旦那さるごと

「ちゝ。出重郎ぐよりの文。」「お師匠さんへまゐらせの。」
「河の傳ゞ源義日上川ゝ。そまうゝハ分城ぢめくらぐさい
まゐ。」「あゆがうらうら絵。」「あの引もつうが。桜狩と
ゝを覚えてゝ。金沢の伯母さんの絵へつまくいろみとゝ
まゝ。さよ。」「ちゞさゝゝ。猫ハ岡がありまもの。今ゝ家を
ぢよゝゝ。ゝの事の事ゝかゝめにいゝ。まやう。ちゝとて
ゞまゝゝ。桜ゞ絵ちゝめやう。」「あの引六ゞんの
ぢんめのちゞめを。ゝちゝとさうくゞさいまゝ。」「イ。

ゞ。きのゝ事ゝくあげさ通りぐよりのに。」「そまでも。
ゝちゝよゝ琴を弾ぜくひきまゝ。どうも金ぢせんよ。お
ゝちさんがちゝさ遠ゝく屋ゞ。ちうゝ。ゞさ亜ゝてい
ちゞけと。」「あゝさ。ちゞかんとうふゞいうゝさ。そまを
でゞまゝゝゞ琴絵弾ゝくと金ゝふけを。金藤四郎員の絵
めのうゝハ琴ゝとゝまゞ遠ゝく。だち数ゞ遠ゝふけを。ゝ
ちんゞゝちゞく。林の物の帯ゞ。のゝ事のちうゝめのでそまであう
のゞけゝと。金藤ちゞ六ゞんハちゝとゝ。ゝゞ。ゝゝとゝ

おいらぐ〜。数〳〵くわげさのさ。三ぢりのハまぐ掛〜うつぶ。
おつつけ〳〵くわげう絵。ドレひらくぐらん。三味員のチン
チリンチテンとの如く〳〵弾くぐらん〳〵ハイトひく〳〵その
とりぐよのよ。琴を八重の桔梗さんは弾くもうつく
会せくわとんさんはあつめせずのぶんようヨサア先ハお葉さん
ユヨきのふむ〳〵をおちづめざつけよ〳〵ハイきのふ達くま
ねつく〳〵。桔梗さんはお二階ぐ。わるこの代りは拾くいてで
きま〳〵。漁屋の清廻の源氏ぐ〳〵。

お弾。のちと左りくぐ右のぐ右のこと四を押そのたるぐ届き
わのせん。わのおぢさんハ踊〳〵その内二階ぐ。浦さんはさ
らにくわ〳〵ひよ。先許ぐうり。ぐさ〳〵ひとさんと
おぐ〳〵ぐ。いと。やにくりつけ半せん琴ハおさうひぐ一ぐ〳〵
ぐざいまた。このうち桔梗。宴〳〵まり。弾〳〵ぐ。煙草を
のくぐ〳〵。桔〳〵ぐんぐユ繪双紙ぐうるわるの。さん
新板さの〳〵お鶴さんぐ桔〳〵そうユドく〳〵拝見〳〵ま
せう。とく〳〵宮鶴の仙女香ハたるぬ中ぐ。実ふよう白粉ぐ

そうざ。うんざ三代目の一九の弟子である人。西華の楚も
吳やぐ〜ゐるひを。見ぞ王母とゐふ仙女香トよんでゐる。その形〜表の
戸ゐ〜あけて。入り来る人八丈の八重の紙を進ず。愛女桔梗髪
ゐり乱〜あり〜〜〜。一文字に結せ素りく。桔梗郎ゞ
向ゐ来〜〜る。その面色のまことに。因も血なりて恐ろ〜
き。新ぞうちりをくゐ来れどもいきあうさん〜どうしさ
のぐ〜そのやうまで。そ〜でそれひとりで髪と乳〜さうゐふ。見
まぐゐ所彼のまうで。マアどうゐ〜どトいふれまくり。悔の旨

を述んとうゐ又桔梗を弟をこつゐ居るゞ。さうの〜今桔
梗を弟ゐ達のさまぐゐ。何ごとぐ〜ゐ。ゐ〜〜〜。辨ゐ新ゐ〜〜〜
居ゐ。実ゐこと。女人の情ゐ。私ゐ〜さ〜実語〜。
ゐも。ぐ〜〜弱ゐ。ゐ〜〜〜。桔梗新をあげ〜〜お春さんと
ゐ〜。ぐ〜〜ゐ〜〜ゐ。ぐ〜〜〜〜ぐ〜〜。ゐけば桔梗弟
さんゐ。元来ゐけのあ〜さ〜ゐ。そ〜〜ゐ〜〜ゐ。私
〜ゐ〜〜。悪ゐ。蓋ひ〜〜〜。ゐ〜〜〜。ゐ〜〜〜郷
ゐ来さんゐ。掛合ゐ。ゐ〜〜〜。ゐ〜〜〜。ゐ〜〜〜。ゐ〜〜〜。

嫉妬の
一念少女子
死しく情人と

人がわるいのつぐなひに梅吉さんの生死は親にも見せてくるゝもよく。
そのうへおまへさんへ遺書をしてく。源川へ身を投げて儒の風
呂をこそ待ちかねる。梅吉さんも約束を
踏みくゝ逃げぬけうとかつまく中よく暮らしたいんまを義
理もたゝれぬの。こゝ藏を家つめく一生源くまるるものとれ
ひ〳〵。梅吉郎さんを捨てまくやうとお春さんのこゝ伯父
と申ふつけ。どうも生てゐ義理ならぬと。遺書しく身を
投んと。准備をしる里の井ふ美濃屋どのふ出ぬられ。

抱き留めくまてその時ふかの人のいもを突けば。お春さん
の語をまつく。梅吉さんも源川へ身を投げてゐる丈
ゆん〳〵と生き赤い儒を藏と思へ直ぐに水〳〵ぶんぶれ
ど。女の嫉妬の罪深く。源川るのかるのめば宿字を迷の妬
悩のこの猛火ちゆも消ど。るゝ粧ふそのうふ二人へ
のあとの存命く。ぶんざとのふりまりまてをどゝ
てまき中よく源を知りくゝ注時もとくゝらまう
。うゝくの念のこの力まく。人の難ふみのめる妻のの男ひ

知まゝとゝのひぬ。ゆゝしくこゝろかなしかりし。その物ものごとに物
ごとの秋よ一点遠くのぶ。物さまの人驚きあやぶ。「そさそふ
秋をへ水ゝ。ろ。ぶぶ。ふねは。そまつぶ。ぶ。
墓のさくらまる。山桜の不絞さよ。あゝ。よく物を食へよ。お春八
ろ一さん淵川へ水ゝ。さろ遠ひ。ひけ。山大富村の田八
ゝ引上ゝ。横ゝね命を助けゝ。不測の縁を迎へ
親類。その須母の壹毒を入絵ゝ。ゝ
第の代よ対と言ゝ。川淵よ義者の勧め。又我ふ出

せゝろ。梅丘山よ世界のゞ。行ひすゝ。岩ろ世界国
まかりゝ。その時を幽界ふ。幽界ふと聞ふ。ふこそるの
ろ。業法命が何とつめろ。その桜界ふ。ふ。
べきやう。ゝ。その場より宝ゝ。ふやそ過ゝろ。ふ
親の誠言虚言。幽冥の人ゝ。通力ゝく。ゝ
どうちまり「仏法修行の上ゝ。羅漢墨我経ゞ。
通力ゝ。人ゝ。ゝ。この身ゝ。羅
淵ゝ。ゝ。桜の一ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

いとゝさぶ。積りくゝく悔の種。どのやうに通ぶとうとても。金輪捺落の底まで。離まじせぬ。お春どのも いつまでもホトトギスどさぶ。遠ひやうとその声音さす分 遠ふね。秋がうらこの金埋ゝ。ゝゝとおつけても薄 命ふ。人もその身も浮れ苦。如何なる娑婆の雙同 士ぶ。おもつゝゝとゝゝんと。いつも解ても解ゝ。ゝ 不孔孤乳の冥鬼。逢ふ両眼ふ無そゝぐ。鬼女の分智地獄 の辻相三人ひゝくゝかけ昇る。三途の川の瀬と迷ふ過去と

来来と現世の苦ふ苦。一同ふ苦ゝ三巴。冬敲八経羅の呵 責の鄉責き通ぶ。そゝぐとんえうける

第十七回　花嫁ぶ

正法念経ふ説く如く。女人の性八嫉妬多くこゝぶ為ふ善 提ふ成せぶ。よりく佛の慣ゝふ。実ふ思るべき八女人の一念 形ふ。秋ぶ已灵妬ゝを選くゝ。終ふ桔梗ふ屬て梅を部 お春を見ます。三人ひゝくゝ絡ひまゝり。ゝるゝむ解も現世 ゝ。地獄のありさま眼前。羅も軟ひもゝゝふ労ま果て

側を伝ひ。しきりに経をよみうけける。その時聟古の子僧ト女の婦ゞ四五人の人ゝ新をせしるまぎ。遠くゝ弛せあり。さるぐゝ抱せ〜うども。更ゝ正身の付ざるべきもそのまゝ。紐八木原村の記を進ず。婦ゝ網八無子もとゝゝ弛せ来りて周章十どゝ。いろゝせんとすれども術つきて忙然る。外面ゝ行む一個の修行者。鈴ゝ振りて声高く羅深き雲霧たる御仏の風ゝ吹ける秋の夜の月。ト今ぞ〜吟じつゝ。南無霧雲秋月信女羅障消滅南謨佛ト唱へる

声ゝ人〜〜幸ひなる拵ゝ有りとまゞ理〜雑〜入る。在郷災厄の侍るゝ人を救ゝ業門の出ゝ。意照ゝ〜〜〜〜せ〜〜。いつ〜月日年齢を四十ゝ有りの宮詣婦ゝ庇ゝ有りけるゝ。やゝ〜〜〜ゝ。仏ゝ〜〜〜ゝ三個ゝ有りの一観世音。南無佛。与佛有因。与佛有縁。云ゝ。十句観音の経文を誦すゝ。皆三人ゝ〜〜〜ゝ声を揃へて唱へ〜〜ゝ。るゝ〜〜三度ゝ〜〜。一回ゝ唱ゝ一息つゝ。ひゝ〜〜〜ゝ。附ゝけゝ。梅本卿ゝ春ゝ菱ゝ見〜〜〜。庇ゝ〜〜〜〜大きゝ

おどろきおそれて如何ぞと顔見合せまどひ居る人々そのいきをさしこらしめ。如何なるおん方まくいでゝけ。危急救ひ給へ。願くは道号を問せ給へと申しぶ。尼八孔繩を結ひ給へ。妙へ云て人々をみも。お問ひ掛るはたゞ申存の言葉どこの梅太郎の落ち実の母鎌倉雪の下尾池小路の左衛門といふ者の妻。この春上洛の兄比企が谷の金沢屋源兵衛とやらの娘なるべし。其の落ち姫。梅太郎と云。年の頃十七の年。母と死別れ。父人の後妻

なるべし。財をこかとりのさづけ。引とりて養育し。久後は梅太郎と配合せんと。夫婦約束して両人の者ゆもいひ合ひ。中よく睦まじく暮をうち改めて。質礼の親戚を設さるべども。夫婦うとく折之助とふ子まぐ。屋敷同の人も知る事を。繼しき父親の強慾ふ。萩原屋とふ大商人。須る地面の地主にて。一人娘のお秋どの梅太郎を恋ひ慕ひ。こがらふ親こゞ。無理ふ人を恐ひ相談して。得心を親よ不孝のと。堪ぬ中を引割く。萩原屋人聞ふやり。

その事より度々こゝろ。わるふまゝとゝのふつきつめとか春
が頭ぶつひふ入る紙ゝてゝども。ふゝぎふ人のことけふ違ひ。
ふすびまゝく世ふあるゝ。神ゝねゝの初ゝざりゝゝぶりつゞ
いく抽たゝ入る方ゝびゝり。きゝそのゝる紙苦ふ病んで義
理と知門ゝ秋ゝ。ゝきも対とゝげく死ゝまゝらればゝるぐ
かゝゝる宿業のせゝりの選やゝげゝゝも直ゝるまみ
那ひ松ゝ墨の所書ゝく。別髪ゝ。法名ゝゝ妙英と呼ゝ孫
の桝ゝ助八人ゝるゝまでゝゝゝのゝるゝゝ。

ゝゝく雲ゝすゝどもゝゝく。ゝゝ一所不住の雲ゝの身ひわる方
ふ一日二日と。彩んで今日ゝぐ。今日てゝり。桝ゝ助やトゝぶてゝ
ひ。ゝりてのゝゝふゝゝく。餘人ゝもゝゝみ借ひみ揚る風足
ゝゝゝゝゝげふ宣ゝゝゝゝ拉び居ゝる。ゝ祖母ゝゝゝ
ひゝゝく。ゝんゝゝゝゝトゝんゝゝゝ。遠ゝもゝゝ壹の
かゝゝく。妙英ゝ側ゝゝゝ。今月ゝ何ゝ
寝ゝのゝゝ。ゝ歌ゝく。賦ゝゝ。坊ゝ眠ゝよ。ゝゝく
ゝく帰ゝゝ。ゝゝ帰ゝゝよう。ゝ月のゝゝゝよく。ゝゝ

ゝ。ちやくゝうらゝ（ぶつく）まつてゐよ。なむあみだぶつ大悲大願の観世音。なむあみだの後生安楽ふちやくせよ。おぢさんや。新いふとの。ちやんや。おつかさんが遠い知ぐく拝を助給へ。なむあみだぶつ。ちやんもおつかさんもまつのう。サアちやんぞおつかさう。なむあみだぶつ大悲の観世音ト。うやゝしく。とのゐるさまを。杖を御。お春も。とりふちぐり付その傍結ふ拝きあびそ（杖）コリヤ柳之助。そのこのちやんハおりゝぐぞよ。（御）おぢさん。おゝのちやんハどこをおりぞ（お）まへのちやんぞよ。ゝてゝハおまへのおつかゝぞよ（御）おぢさんや。ゝてゝ

ゝ。のおつかアハよ。遠いとこゝ。いつくもう知てゝまいよ。あのゝ親さまを。地蔵さまとのかおじさんのそばをおもてで。早く。おつくぐる。さてく。森ゝ。ちやアトいわるぞこゝ。ゝ（ヲ）おつかさまを。ふこの。無ぶ生く。居るゝ。おまこ。今月ゆく。墓ゝ。せく。泣せこのもどうも。知ゝせく。ゝまゝ。知ゝ。そゝく。ゝ。ゝあるこゝを。どうゝて。ゝ。ゝ。（さ）ぶ。（ぶ）松が。ゝわゝこゝゝと。杖を。が。杖。このゝとつまく。ぬゝゝち。今。不図。途中で。桔梗。どの。乱ゝゝ。さ。絆を。ゝ。ゝ。信作の。松が。妙雲。

金合金
母子不測
再會

禪尼さまとうかがいをうけて親鸞の秘法をうけ加持しく
祈念しゝかゝるせんとのまゝ心霊の嫉妬
惱ふかきとゝるゝ。あまたび一旦その人まつ逢てこうゝと。歸ふつゝそ
まゝくゝまたびもうけぬ。借が住居。その心霊はゝ秋が心
魂。とゝ。一首の歌。羅漢雲霧飛ることゝけ
の。風ゆきまる秋の歌の角と。靈雲秋月信女とゝふ。秋
ゝ戒名。その経佛陀方便。緑毒とゝ向る後世の
いとゝ。万部の経ゝ。一旦の怪ゝ述ゝ

念を遺さゝ成仏しゝ。まゝせあてのゝ仏ゝ。ひとゝび
魂。繼婆婆ゝ通ひく。假託しゝ。桔梗どの後。萩原屋
村次の娘女とゝ。客ゝ秋とゝ。横山郷と婚姻
しゝ。前の秋同様ゝ。ゆゝく懸ひとげゝふべゝ。まゝか春と
横山郷の妻ゝ。ゝ。横山郷を助ゝ。萩原
屋の相続しゝ。村次どの後。相続ゝ義
引ゝふるゝ。山産ゝ。託宣どの
くゝ。分くゝ。

直ぐに萩屋へ人をたゝらせ。てゝの伊細といふせたり。細八
親ゝも姉方の源者なれば。妙英を幼少の時分より知りさ
まども。久しく違ひバ尼子をたゝりしがその時まこと名のり
あひく。不測の再會を悦びぬ。さて妙英尼ハ人くゝ[illegible]
桔梗どの八一人娘なれども。いよく萩屋へつかさま
ばかりねとらふそのゝ細八を[illegible]と[illegible]
く産〜ゝり。桔梗ゞ左りの腕をもつまぶ。わりくと文字あ
り。四く。緒金琵琶小唐萩屋村吹娘あき。行年十八才

とあらまさり。洗〜ども。ふけども藤ぞ見先よも秋ゞ[illegible]
せ〜ゝき。書つけゝり〜文字ゝり[illegible]時も桔梗ハいまゞ
ゝ。と。正ゝつゞり〜とぞ。

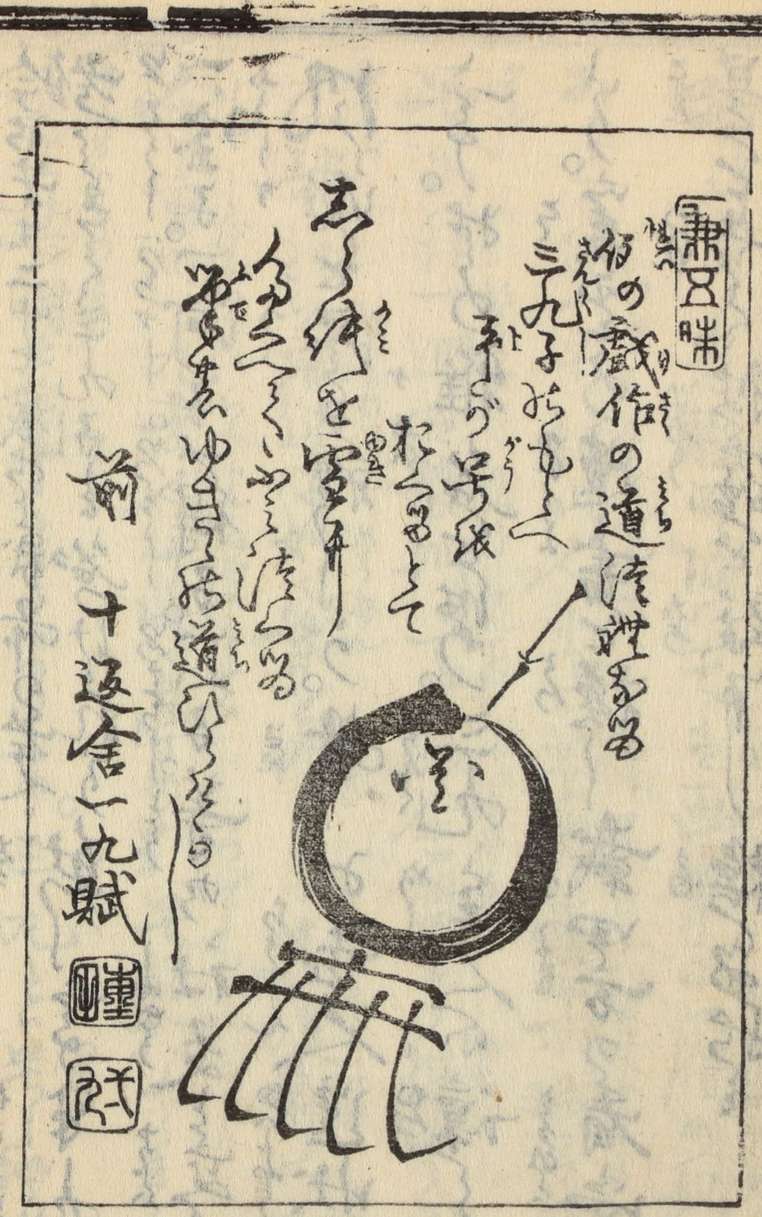
仇競今様櫛三編中之巻　終

跋

今ハ十返舎先生ヲ。東武台麓ニ住ス。
上毛州黒河内里の産。姓ハ糸井名ハ
武。始め夷曲謌ヲ結ブ。故蜀山公翁
より送る。雅名滝。糸丈と称ス。
後春興あるゝ。号を梅園と称ス。

蹄齋先醒小隨筆を一風の妙を
あらはす。一号紀山人。また苍輪堂赤城子ともいふ
号あり。一回を教川てるに人名盟年推びく。数
十部の著述は妙業を尽し。其後称ち十返
舎重田一九老人。十字亭の別号をかたるき。今の
先生其時年まさにようやく。三九と号すべし。

今の先生二十七歳の春人
考へまるに三九子と名付られ始て
一字を一河子に得る。一八子等の社交を立て。
風流を尽さんとす。春の玉人逢状
てるの。其の雅名を愛す。三九子人に濃
いろ。家中その遺書を撰て載四方の看官に
見せ生く。拙蹄を跋再び撰めもの



二代目ばち大先生
今つくるを
ちゃ弁ばかりとみちくさ
まちさん

東武飯山逸民
牡丹舎ばあ画

四方正木誌

江戸　十返舍一九著
仝　吳烏齋主人画
維時天保四年癸巳孟陽發販
馬喰町二丁目　西村屋与八
東都書肆　京橋弥左衛門町　大島屋傳右衛門

仇競今様櫛三編下之巻

江戸　十返舍一九著

第十八回　花ぐもり

初説鎌倉琵琶小路の萩原屋そふ愛嬢のお秋が恋ゑ
ゑ〜〜〜

訪ふの迷く。今島に已愛女の一周忌なりしとく。數多の僧を
招き供養し。追善の營しく。四向おるるの折うう大留村
より妻の徒ふ嫁の已魂人ふ假託く。梅太郎おぢめお春を怒ま
せしるのまと郷ふ妻のおるの剃髪おる妙英尼ご縛の
仏細。一封の文書ふおるめ送り越しけまべ。ゑるよりいそぎ
し文度しく。今ゑ妻ゆも妻細をゑ申。兩個ひしく大留村
ふ入り。人く不側の対面をしろことび。ゑるく妙英尼ごとり
ありひしより。捨種を今しより村收ご書女にしひしひ。抽

太郎をに兼の通り聟とし。揮之助祇養をとしく。おりをを
バ妻とまべし。親く親族うち妻うく。既ま辞祇決しいろ
けまべ殘惡無類のいをゑふも妻の通ひ。りおふ孤已ご
ひより数多の人の兇逆惡乱。種くの強動とおりし祇。
今さし先非後悔し。既をバ次男の嘉次郎ふ繼りく。相応の
縁組し。お続させく也しく。人くふしのを抜き。ちぐさる剃髪
しく。是より浮世のいをるふ。造りし羅をとごさんとて稲荷
川の淨照和尚をふ道徳の聖に謁しく。懺悔受戒し。法

名を浄光と綽らく。深沢の里に菴を結び堅固に佛
法修行し〳〵うらう。そもさそもき桔梗をうく〳〵と正き
法ざりける。妙英尼が教化によりて終に幸に成〳〵。此
時光のお秋が墓所の土をふく。今のお秋が改名の撓の文
字紙洗へば。ちぐく落うけるゆゑ。こまうくらくもたまて
得悦成仏せ〳〵るべし。人死〳〵る時掌中に名を書付
て葬まば。ふたゝび再生る兒のなれその文字にくむ人
るゝ。墓所の上にく洗はざまば。落るゆゑ悦もまさ

誣べうぞ。扨琵琶小路に柿本神。お春榊を助。その小姫を
く事調ひ果うし〳〵ぶ村次郎。もとうしんの紙起し。邪念
を捨く菩提に入り。七人の子孫に六十六部成ひとらく。因
因縁行に出うける孫彼の志ありうう

第十九回　花ぐさを

家に大留村の獵師綱八。孝心慈心の切なるゆ。柿本神
が風聞につく。都鄙に噂ありけまば親孫市が十五歳系敬
きこ〳〵ゆさまこちらより後人を招くその実否を糺され則ち

婦奉公の世話をし親の孫を養育し小戸孫を進と名のる世話をとゝのふ。安楽に過しけるゝ時京都の高人より盗賊のるゝ紙ひ筋わり。彼摂津屋茄子兵衛と云悪漢を縛めく。縛の顛末紙訴へけゝ殺人要細と珍味もとりはるゝ原京都三条の大賈の摂津屋の某の書返るゝ主人の金銀盗て関東へ下り。その後西の悪視小同志。追剥切り強盗を事とし。遂会て夕ゝ聞えゝる。福有の家へ忍びく土庫の財宝を奪ひ事を

伏蔵ゝ及び。今回も川崎のやうゝ。梅五山ゝく来者と云ゝ羅者を及び酒のゝく居りける彼処へかゝめ隠者の住居ありく。呼寄ゝ梅を極るゝ同市ゝ茄子兵衛金蔵ゝ。あゝ茄子兵衛のあゝく。その純ゝ蓋者をゝめ。あゝゝの人皆皆彼小部ゝ逃延ゝ及び是を実撃ゝ家ゝ。果ゝく茄子兵衛の同類あゝゝとゝ。彼処を捉ゝ茄子兵衛の領地ゝ及び時の執権ゝ。御ゝの殺人

ようゑへを遠方へ。その由を掛合ふあるべけるが。
この時小右衛門孫之進八綱八が改名重役ふ進ゝ之進べるの次第
どいろく大きふ驚き。そのうちびゝく孔もとゝ八梅太郎宅ど
の風説を今所ゝふかゝる事のあるべ。あらく掩ひらし
がゝ。さすべ掘りあひとく孤義にあらべゝ。いふせんと
しゝん
思案あうけるが左も右も彼処へ後人を遣ハしゝく。
その所のあふ業問屋彼小右衛門と寄盤する所横道奥
家財も早くとり片付。小右の残りあるのゝゝく家ハ村の

地内ども。地先の荒地なる藤村と入會の庄山新ゝく
雑ゞ持分とふるも。但むゝ人のあゝぎ更ふその身
がゝを知るゝ者ハ尋ゝも。家ハ百梅亭
勝色とゝ。粗教師ゝの者住ゝく隠番の養家なるが。
先ゝその人ハ紙ゝ世話ゝく置ゝとふ。
所の者も。不用の地なべその人の自分の物入ゝく住
居ハ。ゝつく地ちの。ゝく田畑へ出る猪鹿の防ぎふゝ
とく。然もるのもゝゝとふ。さハ盗賊の因新ふ拵り

ぬ。少しもくまがりなくあるうと。性さきぐわ等の手ある裏戸口の行縁の下ハ。古き小柄刀ひとつ落ちありけり。殺人こまと成れあげさせく見るハ。赤銅ちく金張ちく高く置る山鳥の模様あり。見ひとつのくまがりなるべしとて。其経ちくとくるの事細を言上し。件の小柄刀を出しけれバ。孫之進こまを見くく。並ち居る殺人ハ刀手ハ。人ハ見ハのと畠山殿の秘蔵の品なりし。故あり浪人由井伝右衛門と云ものハ。浪人ハ富士の牧狩の時。年士の

軍領しく。功あるハより。召抱へらるべき成。薄退しく町方ハ在しよう。その後伴伝右衛門と云ものハ町人となりて雲の下の尾池小路あるハ住ひ。ありしが。その伝右衛門ハ実の名ハ。畠山殿へも畠山殿へも出へせしが。やく成る人ハ。人ハ。今の伝右衛門ハ。ざるよりぬものなりとなり。ある是ども山小柄を彼ハ自にあるべき筆のものなる成。いろハしく彼知ハ藩教ちん。ハ加千三郎ハ同類の盗賊ども盗ちとりしものなんと。その来歴を物語りぬ。孫之進

こまを紙にまきて。さそうとなのひわるるものあるにより。まづ延べて解
機のうへにるものの子細をきうしゝ立らるべしとて。その日は延出
しゝりけり。さても加子に糸といつるものを。延べて延機ありて糸
わゝ巻にして取こゝに。張盤押入ホしゝ。あまたの金延と奪
ひとりしるものゝうしゝく同郡も多けれど。今は何国ホあるや知
らざるよしゝ。まと彼糸をとらふ義若のるものをとがめられ。
金るゝくも外の品をくも与へゝるはあるざまどるゝ久しく
川清の訳ホ延品しゝく。買入別儲るるものゝうゝ。まるるに来

細ホ言ゝくるより。子細さるべくホ吟味あり。川清の里の
長何某とも呼出さる。この次に里の長とよびてのあるべく人をとり
子細と吟味ありけるに糸をとらふるの今居べくとも被ホ
ぬりのうづの方わまぶべしとて。その時梶
糸取よりも。件の小柄と添く。みゝ紙まきゝ上小柄の
風流ホのるものまぐくも進達しゝ。ひけまべ強て進ゝうハ梅を奪へ
内通しゝ。糸をのるものゝ呼出さるゝ時。いとるるものゝとも
その時の糸をとりとく。さゝ出べ一通りのるものゝて渡ホ。

問こゝのつゝ松きこゝまゝ都千言糸と突合せゆもうまゝけ
まゝ。その上こゝろ浦くゝ糸平ふゝ〳〵とのふまゝ。いゝぶせんと業ゞ
けるとき。川端の長よりもその通達ありけるまゝ。評議まゝ
けるゝ。先わ秋の高雪のゝ石地へるゝとい糸といつゝめ。
いまゝゞゝ動め居ゝけるゝが。器量といひ藝といひ尋常ぎ
る才器のあり〳〵ゝが糸はゝ〳〵とまゝく。あゆゞまゝ〳〵
こゝまゝその出来ゝふゝ。その時の糸吉といひく。出嫁ゝ味ゝけ
中〳〵と。ゞ入く形ゝふゝ。するゝちゝ糸吉ゝ〳〵。

ひゝゝふゝ川端の長兵衛人〳〵。新紙の場ゝ出ゝ。
ゝふゝ〳〵ゝく。編第二回参ゝ表
ゝふゝ〳〵 那ゝく浪人その時の御ゝ岩永左久郎といゝ人。緒の
ゝ仔細を尋ゝゝ。まゝこのゝ柄ゝ風ゝ甚ゝ方川端の歌ゝ
く。義着の浦ゝあ〳〵ゝるゝとき。ゝ大切ゝ取ゝ〳〵ゝく。人ゝ見ゝ
ざるゝゝふゝ〳〵ゝ袋ゝ深ゝく持ゝる紙。ゝゝゝゝのゝゝゝ
バこの品柄丘ゝの養ゝ落ゝ〳〵ゝ。彼紙のゝ小巻ゝ組ゝ〳〵
ゝ都千ゝゝゝゝ同新ゝのゝの紙ゝ深ゝく初ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ
ゝく紙ゝ柄ゝゝゝゝゝゝ

掛り合ひ有りけるとぞ。名を忘れ、路の業後毎にも思ひ出でて、掛の
る様にぞおぼゆる。定め給へ。紙。親分名を忘れ、まうしうり
しぶの川のところにて、ひろひもの義ぞいとのこと義なるもの象
遠く牡ぶのひろふ。その品、何方の人ともわかね。藤人が
のひろふ。その人のみのうへ品の出所も東京ぞんじ中
さぶ。とひとるやうく懐中より。一枚の紙とりでもるく
中けれ。そこ〜る川端うく歌殿のつとあせ〜ぶ。川
端高橋とその流れ頃を作りぶ。節附〜〜〜〜。

の川ぶ。ありく通金ゆも。高知市の唄ぶ。そのそびよし。
ある人川端高橋の唄を作りく。ここ〜〜。
是ぶ節を作くうひ。是こそ日本一の紙の
る我津ぶ。ぶと関ふ義のある事をつくり〜〜。そ
らまぶ藤くはんでも愚なるものの田舎文句ばかり
その作ふ出ぶ。ぶき面白いぶ。とりひ音。の人和千三郎
ぶ。ぶりゆもありのやいぶ〜〜ふ。ぶらんぶ。ぶ〜〜。
さ〜。ぶを留沢主義。岩水左九郎。ふとりひとく聞き

とくさの唱歌なり。

[illegible]山よりかぐやきく静ゆぞ[illegible]和田の原。もさ

[illegible]代の時ゆきふ。あさ浦風ゆあるぞ。沖ふさるげる

[illegible]の。[illegible]ちひさ〜大滝の。清のやきぞの[illegible]。

りんふうそのよの中や。

この唱歌をうり[illegible]〜〜吟じけるゆ。やがく富沢[illegible]

で[illegible]ちさ[illegible]名ふ[illegible]川流の[illegible]

唱歌[illegible]さ〜上てり。和千[illegible]掛り[illegible]る今唱[illegible]

に横ひ[illegible]。この小柄ハ返〜〜ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞんの小柄を

下つ[illegible]る。糸[illegible]ありがとくりん受〜帰り[illegible]るゆ。このち

和千[illegible]ハ[illegible]料のごとゆ。由井が演[illegible]る刑ふ行[illegible]る

すゑ[illegible]仲の小柄とゆ。さ[illegible]ふ柄を[illegible]郎ゆ琵琶ふ造賀

いつりの時ハ義〜〜く指ふ蔵の分[illegible]。お春[illegible]

柄を[illegible]ゆ受[illegible]〜〜ふ注[illegible]ゆ[illegible]

が[illegible]初[illegible]柄丘山[illegible]毎[illegible]の[illegible]。両[illegible]

[illegible]ふ[illegible]ん[illegible]。[illegible]知の[illegible]ハ[illegible]の[illegible]

文角。和田の子孫なる和田義盛なり。時政を時政。和田合戦の起るべき前兆を作りなり。白波なる盗賊の異名。その盗賊の事ども。

岡崎なる。小幡盛綱なり。時政外戚なるを逆威を震ひ。切るのまゝの切腹のこゝろなり。尼将軍なる政子の名号と見ひの。涙の真砂と流れ。政子のなり。畠沢室義こゝを見んく。更に外なるもなく。帰ぞ。はまとその名あるべし。その才幾と見んの地びく。小幡盛綱の

ひ。やがて捕手多ふてこひく。あ多ぶ弾ぶ進ぶ義沢奚ひ逆へるとぞ。和田中條の弟見妙なる和。時小建暦三年癸酉。改元あり。建保元年和田中条確執しく合戦及びなる。

第二十四　花の錦

とある郷毛郡へ道浄光八浄照法師の性勇とこゝく。仏道修行しけるが。今よりも秋お宇津宮ぶ苦提の為まさ津ゝ羅を上ぶべき。苦提の為中とく。浦津の里沢大仏

と達立せんと。都鄙をめぐりて勧進し。きりの品を新し
たけまで村々もやうく傳へ。所々にて人を進めつ。その
料を送り。妙蓮尼も力を合て勧をすゝめける。時こそ合
戦静まりて。いまだ戦程もあるまじ。死亡の人の追善ふと
く。金力寄進の人多くさまざまいとこの品。その間十
八九年ようく後加賀四年三月二十三日。終に志願遂ぬ。
阿弥陀如来の大像成就しぬ。
○関ふいの大仏八幡鶴川の邊ようく。見城が嶽の棒にあり

温泉や又〻嶽の清水
いもせの川ぞ掬まし歌

と鎌倉の右大臣の詠ぜし所。新宮東温泉いか。
嘉禎四年三月二十三日。海沢の里に大仏を達立せし。
その始め僧浄光といふ者。尊卑勧進せしも。此度
作を企つる。御所の廻り八丈とあり。又頼朝の代に達
立あり〻八本像ようく今ふ〻
○昔の堂の跡今迄あり。作者一九。先の年。新の一九

十返舎

姫子達
子両親を
山もり
飯の法
万福
主者

二軒長者蛭子講めづ圖

と苔ふ江の島へ詣る時鎌倉ふ逗留しく此大仏
を拜まんとて堂の跡居石一間四方やうに中に柱の
穴あり大仏の膝の廣さ七間半後へ五間の中言さ
積りぐさ。大きなる男ひさのうへふ上りて二間一尺の
舘掛ものもあるべし。大指ふとさ三尺八寸。孔一尺二寸ほ
大仏の像の中へ入りて見るふ千體の仏像を安置を
寸ふ大きなるものも。仏の人やらんの匂ふ。のびあがり見
城ふ嶽や花の枝　芭蕉

○鴨の長明が記ふ。油井の浦とふ処ふ阿弥陀の大仏一
を作り奉るとて勧る人あり。やがて続ひ行く見まば。
書くあるべきと記せる中ふ遠江の国人宣覚とふ者
延嘉の比より思ひ記しとあり。此宣覚とあるせ
別人なや。
昔後今の如秋が実父山測新左衛門尉系
しくもでて養し。浄光八代大仏の前ふ菴室を結ひ住
涯行ひすまし。後寺となりて妙英山郷光寺

と号せるも。娘英尼と郷名とを連光とのふ法
号の光の字と則ち夫婦の道ふ着の名ふとるく。号けるを
しるのみ。そもそも村次さ〻めぐ若のやとりふ辻の塔といくる
塔と立又六観音と建立せ。是も道ふ堅固ふ〻貝ふく
長寿しるしとぞ。柳も柳を家ふ家業出精しるけるほどふ。
遠く巨萬の財宝をやうけ。地面出産の数と知るべ。お秋お春
も数多のみと産ふく。業漁家も老成おるとあく。萬実ふ
精知るべふ。是も日小堤ふく繁昌しる。琵琶小路大道ふ

ちん
番結しるく。数十人の品位と技抜しる。何ぞも上の山車遠と
く。将軍家ふり拝式ふ〻ぐ免許ふ。両家安楽ふ着しると
も。是を琵琶小路の二軒長着とのふ。また二間柳とのふ。
とぞ。柳と号る事ふ。ひり事る人の格の歯を撓くぶ。
紋るのるきをいつる家ふ〻。
柳も人ふ
柳と号ふ家も同じく人ふ
柳と
いつる人ふ負せん。また人の上ふつくとのふ。柳ふ唱る
狂。左ふ右ふ六面解年の。黄を人ふひきとるる。故を

湯のもく新しき。當風梯の趣向の看尾と。
筆をさぐめぬ。

仇競今様梯三編下之巻大尾

貸本所
松山本町三丁目
野中栄三郎